連載56 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（64歳・内科）

「先生助けて」と電話してきた患者と、それに戸惑う青年医師（当時47歳）

平成8年ごろ、独居の女性H.Oさん（明治43年生まれの当時86歳）の在宅医療を開始しました。脳梗塞後遺症で寝たきり状態にあり、認知症・糖尿病などの合併症がありました。磯の香りがするあたたかさを感じる松山市郊外で、老人デイケア（レクリエーション・リハビリ）の送迎や訪問診療を行いました。約2年ほど経ったころには、とても明るく元気になっていました。しかし、ある日突然、在宅医療を中止したいとの電話が息子さんからあり、引っ越されたのです。

それから3〜4カ月ほど経ったころです。「先生助けて！変なとこに入れられたんよ。迎えに来て！！先生のとこに入院させて！」と、H.Oさんから連絡があったのです。お話のままに出向いてみると、松山市内の特別養護老人ホーム（介護老人福祉施設）に入所していました。「立派な施設に入れてよかったですね。24時間365日スタッフがいるので安心ですね」と私が言うと、「腰が痛いと言うと、自室で寝て安静にしなさいと言うし、食欲がなくて食べないとすぐ片付けられてしまうし、痛み止めの注射も点滴もしてくれないし・・・」と訴えてきました。「デイサービスもあるし、レクリエーションもあって楽しいでしょう・・・」と言うと、遮るかのように「風船バレーは、施設外の来客がいる時だけすすめてくるけれど、普段は職員がしている・・・」と、怒りにまかせるように絶句していたのでした。申し訳ないのですが、私はそれを聞いて思わず笑ってしまいました。

しばらくお相手をして「また顔を出しますから、お元気でね」とH.Oさんに言い、施設のスタッフには帰り際に「大変な患者さんですが、よろしくお願いします」と常識的な挨拶をして施設を後にしました。しかし後日、後見人の息子さんから衝撃的なお話を聞くことになるとは、その時思いもしませんでした。

息子さんから聞いた話とはこうです。H.Oさんは後見人の息子さんに相談もせず、ご本人の自宅と長女さんの家を勝手に改築してしまい、貯金を全部使い果たしてしまったようなのです。それが原因で、施設に入所することになったのでした。ですから、H.Oさんからの連絡は無視してくださいとのことでした。

それからは、H.Oさんから連絡があった時は、昔話をし、今の境遇の悲しみを語られる場合は、なぐさめていました。しかし、それは私にとって、力不足を感じることでもあったのです。このように、いつもとは違い、積極的に行動できない事例は初めてで、消化不良で、なにか苦い思いが私の体の中を激しく駆け巡るのでした。

やがて、連絡も途絶え、H.Oさんが天国へと旅立たれたのは、さらに1年ほど経ったころでした。　合掌

大家族から核家族へのまっただ中を突き進んだ団塊世代は今、2025年問題として、社会保障で注目されています。これを解決するのは、容易ではありません。

ですから、世界でも経験したことのない、超高齢化社会という未来をふまえたうえで、「宇宙の壮大な歴史からのヒント」や「専門化しすぎた分野の視点ではなく、one science（ワン・サイエンス）の考え方」といった視座で、新しい価値観・絆・哲学を再構築するべき時がきているのではないでしょうか。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 19名
（常勤6名、非常勤13名）
内科・外科専門医 16名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設！

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する
臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/